

## 古典×現代 2020 時空を超える日本のアート

国立新美術館（東京・六本木） 2020.06.24～08.24 （会期変更）



本展は、仏像や刀剣、日本画といった古くからの日本美術と8組の現代作家たちが共演するという企画である。

主品作品は、古代美術は、「曾我蘂白」「尾形乾山」「円空」「仙厓」「葛飾北斎」などをはじめ、鎌倉時代の仏像や「伊藤若冲」を始めとする江戸時代の花鳥図、刀剣の名品が展示されている。これらに対応する現代作家は、「川内倫子」「鴨池朋子」「しりあがり寿」「管木志雄」「棚田康司」「田根剛」「皆川明」「横尾忠則」8人の作家である。

葛飾北斎 《富嶽三十六景 神奈川沖波裏》19世紀



画伯「北斎」は、江戸時代の数え19歳で人気浮世絵師・勝川春章に入門し、その後独立して琳派から西洋画まで様々な画法を学び、70年もの長い間、浮世絵界で活躍し、常に新しい試みに挑戦をして膨大な作品を残している。

しりあがり寿 《ちょっと可笑しなほぼ三十景 太陽から見た地球》2017年



ビール会社で広告宣伝などを担当するかたわらマンガ活動を始めて、退社後はギャグを中心に震災や原発をテーマにしたアンソロジーなど社会派に至るまで様々な漫画を描く一方、美術館などで積極的に作品を発表している。

伊藤若冲 せつちゆうゆうけいず 《雪中雄鶏図》 18世紀・江戸時代



花や鳥を題材とする花鳥図は、山水や人物と並ぶ東洋の伝統的な画題で、本作は、雪の積もった冬の日に残った餌を探す雄鶏が虫をついばむ鳥という伝統的ポーズの描写である。

四季を通じて真っすぐ青々と茂る竹は四君子の一つに数えられるが、何故か節でジグザグに折れ曲がって絡み合っって奇妙な姿で描かれているようである。

川内倫子 《無題》2004年 日常生活の生と死のもろさを表現する写真家。